新板繪入

義理記

へ13
3398
5

義經記巻第五目録

一 判官よし野山に入事

二 志ひがよし野山にてゝ御ゝる事

三 義經よし野山を落給ふ事

四 さてゝのぶよし野の御ゝ事

又 たゞのぶよし野山の合戦乃事

六 よし野の清水判官を追かけ給ふ事

昭和五年
春二十一日
小田野吉氏
長男友吾
郎氏寄贈

辛公平
渡部
七軒町

13
3398
5

五巻四

[illegible]

四　たのぶ[illegible]

十六人[illegible]

[illegible]

[illegible]

そやの女にさき事をかしらだらにおひなて二和尚の弓れ事
中にて殘れとゝらぬ為僧又ゆゑ人前後にあやませてまりさ
そこにかんに事ある法師ハ宮十ばかりにゆんとゑるかからん乃ひて
まれ申ふかれ程の暇事おくまれ乃志力とも紀雅乃本れ
四枚半てけれ也矣法まそよせこりをるゝ此法服そのの
おりて再すゝ出て大事あをてゆゑるハ掃代山まハ道金及
乃ハ茅村なる女の後ゝせかひはまれて吉中の修行よれ
ゆまむかひはへまゝしらハ何乃書恨はまゝ○ハ一先おらさせ女
ゆへ此文討死あそ近ゆりんかはまへ中まれがかハ後りはまさ
うれゆされは屋とさかしけにゆゑりをれば宮良之来見し後
はてあゝ事もとろ為ゆ清和天白王乃御と思ひ良村女
ハ後ゆまはゆゑ今までハ寄ゆ事ハ志くぼりをるゝ月来ハ
ハとふくひまゝせ半まれハ何乃ゆゑこそ人の後云まゝりて

道金女ハ中ゆ岡村不和まれ近まゝてとも無実なまゝば
などう思ひなとあハざらん おもれ也思乃大事なる子細と
むかゝてさけと云ハ法師ひなかも乃とろ思ふんかまゝるまゝ
内大臣乃ハすゝ思ふんかゝこうのあうゐん法教さ思ふん乃ゆゑ
かゝハまゝ思ふ乃庭月ゆ二男宮ゆ長来乃せう教ふ乃忠信
云者なるゝ後ゝ為んぞるなれよ少ゝ吉井の小法師ゆゑ
云ゆゑ川くゝ乃法服見と少て いやをふいられうと思ひて
思ふもさゝゆゑ宮ごふかゝめさてぞかゝる忠信見をとて
六人乃志ものにあひてゆけるハ見あを近けて ゆゑる ハ宮
なまハ見ふて鎌乃りんだうとせよそれがハ中ぎ二三まゝ持
てゆそ宮川乃ゆ上とりてゆゑのうしろよりゆゑ称らひ
ようゝぶゝ一川そかさらまそあんぞそれいて乗ゆゑ為僧め
がくび乃ゆ称かを法けゆゑ矣いくゝ乃ゆゑるゆ川ぐらをひちに

屋うもなは歌いう志緒は其雲霞乃ごとくにつぎこり家に
てきてまたくはあへなく討まとるとそいはまんどろかこゝに
て死こゝは自害あるまといはんと思ひてくさまどりはいんで
殺石に向て思ひ思と出てゝ稼おりまたり二丈はかりと
び落ていはんとさまにあふ事なれば甲乃志こゝろと乃
をそこまにがくはんも皆と乃ぞきそぞ立こゝろ事よ
さなくアんとさせかふぞや返合あへや君乃出徒とたよ思
ひ来せゆく鶴は鶴海乃はかさの津和はかくさん俵渡
乃鴻東は思ぞ乃ち志まゆでぞ出徒中さんとうぞと中も
はそぞ思ひ思と出てゝ稼こりまゆぐ志こゝろ事ん
ん乃きりめ乃ゆ事さは芳よぞ里とふ木乃洗乃ふ刂を
てまゆさるさまにどうこあろび思信がお拠ひつさげて待
ふへ乃さくしあろびてぞ来りまゆ事おきあるおとゝてひら

いて下どうに太刀は沙ゆる宝拠なり腕はつよかりをるとかぶて
乃まゆかうはくことおりまゆ志やはらとなるゝ斗ぞ切付ゆる太
刀とひをばりはとふまで おきんしこゝ見れ見こくよりはまり
て ひきとくさへてこゝ下思さんと斗とうれ縛まて四十一まそぞ
死よろ思ふ和は切ふせて思信は志びやまきておきへて首と
りれはしと太刀乃さ死はさしはらぬきて中院乃拳よりて
て太乃ト思とゝて太乃中にはしひこひ里こゝ者やまこ思に
ゆそこゝろかくはんがしびとは家縄が見こゝろぞりんていあらば見て
ゆうゆうせよとうせんとて雪の中へぞなげ捨ゆる太乃見
こそりくはんさへもりかはばまして我うさしそあらんぞいざ屋
林庸に海中て後月乃せんざ来せんと申ふ事なれば其ふ志
はんと申者もなくてしまき無間ぞとぞ申て大乃は林庸に海
中をれば思信もうち者理に捨らまて東和と沙ゆれば甲

ひけるとかせばまことにさかるとも言事も志ばしまして六月をさ
かる海よりくといふ事はしこそ神てきをはらせ君恐ちきて
東代乃振羅にもなるまじくはしくとそ乃あひ合ふ兵衛さ
らばくらかさんとて十六の大あく又百の中國むりしやうれく
さん国までの代々の四門ゆゑ沈沙くさかりけれ乃拒とかくり
君ことまば歟は矣法は近付たまふ全ゆるに立なしびて志づくさそ
かくさせて此あふ十六乃大國の内は西天皇と見えて此志ならい
國ならないは此と中國あらはれ此の境にかくふ山と中山乃柿原に千
里乃廣野にしかくぬ山は寶の山あて左やまくしくとも入ざりしを
ならないは此乃五此山とさらんと志召て又十一万きこれ軍出でとぐ
志て志らない國へ打入あふの此乃王も賢王にて渡らせあひ
ゆゑかくて見と志りあふるあふかくぬ山乃和のこ此せん乃かけ
立れあこ見にせんとのざうあこ中に一乃大象あこ此王は象と

れて朝あふ日に雷石とよひ乙郷せんざあこて此象とかい
ひあひて河乃蓋かまこ中さんと中さんはまば河乃給まいから
かけせんにあふまなくんやとせんとさてこあひ此ひ乃外に無
軍おきにはまい我士とむけらまもせば象と召て沼口と象
のこゝにあてちんか悲と思ふなと宣旨とかくめて敵陣へ
もなるあふ大象いかりとなて無象なれば天に向て六志かく
なれば大なるかゝ貝と子撮て吹かごしまゝ鼓こ河すいまことり
せまゝへがこ左乃足と出てそあこをふこなれば一度に又十人のむや
とふこゝろまも七月七夜乃合戦に又十一万きこゝろうたまぬ代々
乃ひきさふひ三人上下十さに討なきれかうぬ山乃和のこ此を
こゝろまゝあふ沈は神無月廿日あまりの事なれば今にしに仕事
ゆゑきて むらく雪乃あけが乃とふこ志こきそおちす國
皇沼才とたまこなんこあ也やこ河とさうさ海にきてあらふ

やとそ讃させなふ義義房我よりも外に心もかうにあ
んもふるき者あらしと志せうて心志ゆかねしらるいはゞ氣
行なくぞ候へきなる其日乃ちん陣ハ浴部乃清服ぞ志
りとうりをる流流よおふて見るハこゝに心志きの為ハ
かゝ今まで貴へ下てあるあとのゆまゆまゝ貴ゝ事なし
たゞ今来るいくとゆられハ後ちんよいうせんと云ものに
りとゝ事て見とゝてさる事あつ凡九良判官と申ハ今まで
そこらの人なり父義二道よこゝたるまゝ候ふ事ハ
どもに一人出子なるぬハなし其中に法師二人あり二人園城
寺乃法師まひこちだうかいぞんとてよりかゞ志やなり一
人ハ稱りとの僧正乃弟子也さ房と申ハ美朝我朝乃合
戦乃法事とめいくよ好こる者よてあるなかう海山乃ハの
あまそ一国ハ家よ責こそられて皆とさるさ海よりも紀

わらちかうかゝ堀のみかどのこらん御ずいとひさうらふす
ものなん寺すいふからつきそかくをひらけまかしらたの夫
法ふかゝる事八いかにもせで御宗で同あるよりこゝへいだ
御りさまいかなる人一同よおとろく事よ判官なりしゆかに
ときゝてもらひたまへるさらぬは西てあつたるかさむけて
かくはいらうてぞ家内なされ雖和一同に夜神川にて
よきかたの瀧とぞいふなるをとかん二丈なかなる瀧のうへ
とゝろしうるがごとし下をみまい二丈あまりとある紅蓮
瀾水上へしと雪のちてぞにほんさまするてせでのいへ淘
とたく波かすらのとくにくせざとしこゝなるも此ひをかの雷
一丈をかなる渓ひんの屏風をなすがごとし秋の東野
みもの今まで淳はむ雪をかさえもせで雪とも外もひ
らふりさとのひろがごとしむかし房かへ今もはれよいつのやうに

にりてこまれハいかにしてゆくべきこあかんとむすかれ人へといくこめん
まやみひとらん文何の車なきまへ六月の宗三山川を車遅参終つ
こにはすへやとそ申さる判官のおひとりハかならて見えいにも
あるまきぞあまそいひ切て勝ちまへやとてそのおひとら弁慶よ
なるハ人へとおまるすゝるぞおきにはなてゝ川のほとり事もならなかたな
眼とおさき紀捷申たる源氏ともあまり人まする大河いい
此の雑よりの寒さとバかりかまへきあるいのかさぞ安徳よせるまと縄
退かへと戸関とひきかれくかられしば御みくこあまり平真
おつゑ和尚にてやよりてみまいばなき方さ出さぶらふさまご
そくよおいへたずさして木のころかむかひとかんまへ上舟
の何ほころ平家の一むかおひとるやにに雑よなるくおひこ
あまみなやまひとみやもむかしほゝまて日妙ありけろ雪かさと
されて河中へたえいかへまたろく行乃末よへうらくさとさ

げころもうちひそみつゝもろ〳〵かなしとこのひて
ゑ給ひてもあらじとこゝろぐんぜんそれ神をいでや佛ごてうんこそ
んぢそれ〳〵いくばくの日のあらそぐくまつかなるそこの御
さま平かならざらんよおかしなこうこそすべてこれそうな
ひでおもふことかくこゝろみのおもひをもとめてさうなくすべもそ
つとうるさくおそろしくなこうこそすべてこれそうな
あてなくうるさくおそろしくなこうこそすべてこれそうな
ふもまてそかくこゝろいとくるしくおもひたまへりぬ
おもふことをうちいでゝもいはまほしくおもひたまへりぬ
ふことをうちいでゝもいはまほしくおもひたまへりぬ

ぢ〳〵かなしとこのひて
武蔵野なる松尾こそんとすれおにはむさゝびのあひ
そひつゝてふるまひをうらやましくおもひたまへりぬ
ゐまは御ひめぎみこそおもひたまへりぬ
とそれが二人のくべきこゝろいかゞ
て御ふみとりそ弁ぎみとひめぎみ根尾よりひめぎみ
ひとりそ〳〵ひよりぜよ
そ給ふこゝろ神なるもたゞ
もをもひたまへりぬ
ふことをうちいでゝもいはまほしくおもひたまへりぬ

かけ来とは水にけてそ出こうろ。相友はとひ付と来るせそお
とせとか腹はこゝめくるとかゝる。相友給とかへ出ゆるはた
たきるまてお川なるむかへ乃事とせ出てりんあひろ。あとぬ
ゑこよちよくは母は来てひるがへ。弟と好きかうちよは行は
来てこれ入まで。人間乃得くまうはりへよ上ゆまて天はあぐ。ちや
うもくだうは浮木は来てこゝかとまゝる。義經は行業に
来て今の山川と浮るとぞ乃あひて上の山まぞあらわふ。
ある者乃洞は風おのしをきおもこ歌川とあしバ下矢さ紀は一
矢ゆく矢ごの法きだ腹ときまゝるやはぐら浮るとえまゝ鳴
呼さて加へせやとぞ給ふる。大宮經なくとよせかこうぞ越
給ひたり。宮やこゆるかこやこゆるとこちぐよ乃くゆるり。
ぢぶ乃法服かゝる。相友なれはとて見神まてもよるあ
らじ越こる和はあてんと向とこれはなびきこる行とこゝ

ゑて。されはそと思ひて。見ゆ紀付こえんまはゆるまこりあて
ざらんまもやも乃どもとぞかゝる。祿ゆるかなる法師暗黒
に神付てきやまるが。ゆゆと長刀つきまもきて二人
ゆゆてとれくきて。悪い悪と出てぞも祿ゆるもゆる行乃
来に紀付て悪い屋しこゝゆるもれば武蔵がたゞ今本と切
てきやまる行かれば。川ゆくとぞ見ゆ。若殿はたゞきこめ
らまて。二度なるんとぞそこ乃こゝ川となるまゆるまもゆる
ひゆはよ乃山まて十六人同者まど川と笑ゆへは大宮あまま
屋もかゝげておしもせぬひたゝ乃ぜん。かゝるは見はむきし
屋といふれこ乃着めぐ和ゆまてあるぞ。志がしくゆては中くおこ
の者がまは。又ゆ上とめくらんぞるは日数とへてこそめくらんを
まいさやゆわてせんぞせんとぞかゝる。きてこゆきいで来る祿
へてあるんといふもの一人もなむ代義はきゆもやとてもし

がひとつの神乃上よわきてゆづりとせしおりて我一でい一
ぜう乃佛よなずら二とがゞぶ乃佛よなずる二と云道乃神よ
なずら二とおさん志んこうらみとそおきこらやかゞちゝいずれ
十六人今も十六人まん乃御前は一切きしと見おうらと云重く
ふそく身もなら今一乃御よ佛乃かわらいとて一円おさ
ながよ飛くし又川しとがぞまし乃徳あん今世宣ら御へ見
と從てみくおのうらてぞなすらえられおのれかなる世乃な
らひらおゐ君のまゝよそれてや従のぞこれはにがしと云ひ承
らせぞ祝ミよ孔継加〇ははきさ馬なりと従てこゝそれ無乃
極みもとおひ弟をも候べき母兄も従てあるべき其妻乃極
よりおひな伝をもその風されて鬼神をあざむきさゝしを
もろゝへまでん命をもちつもわくさるも云ぬも乃ゆめ
ゑみよみつひの継とぞぬしらん[illegible]乃申すそ[illegible]

判者をも此傾城とはげしかふ弁もちてもあるまじになるぞこれ
こゞなるまごとをつね神よりて道なけらのその[illegible]れ極み人
の爭をせずる抱とねてつべてなのまゝぬものなるを
あるいはこのものまでそわまじかいやうか力ふおよばざ
るを学なるを身をたるゝけぬの小年よ我かうらうやこの原
ものみれてもぬるぞうもなれしとなる孫見
にわらてひとでからい女斗で孔迷ろる君もじいう云さ
つまとおもろろふ此あれひざ申つきてたの下へ迂
らう男も抱乃大なると孔迷重も乃上これぞおさるると
ゑろくこそろなふなすろんとおひてさいかても
たおくろこぞこれ酒と合てねころあると絡をと
かとみけ二迷と云君乃御前はとして二どを
せではすむ前乃てはれ迷ひ酒はちおてち

いさ志ふかどあらばそ。はしこはくもさて乃ませ。弥ゆさ
けをはりちこるかはらをはてさうけく三どのこて。雨も
ゆまに風もふきを。今夜はふ事なしとて。其夜はそれに
てよとあるに。ゆまに十二月廿三日なりしさ乃ゑ山路は
も乃うしいざやかりしへ乃ゆひておりしとさて下りし。ふ乃ゆ
ゑ志げこら笞といふ所まで。は出給ひ。そらかゆるがさしちう
かりんれば志川乃と志川乃めものきとならべう。落人
のなしひはよろひとさそはうゆまに。我ら世ふごはもあら
ばよろひもんままるせぬべ。命にまぎこる抱あじとて。
志げこら笞のこぼくの中によろひもしさ十六ゆゑ
ぬさすてて方くにぞおちかゆ。年にむ月乃すゑ
きはしぎ乃弥ふ。奥州へ下らんぞれば。其時なりしぞ
一源今出川の為にて別あらべと語をれば。ゆてと

乃くなくて立利。あるひは木懐とはうもたいご山
科へ引人もあこ。くらゆ海乃をくへゆくもあこらくちうに
志のぶ人もあこ。判官はさふらひ一人も見ぞ給ひ。さうし
きをもつまゆはで。志きこうんとゆきしゆきめ。志幼
はきまはきて。十二月廿三日乃夜うち海けて南
部乃くりん志のだうとくこのりしへぞおもしを海

義經記書之第又終